アントレプレナーの生き方（8）～清水建設と渋沢栄一翁　その１～

「清水建設株式会社」は、文化元（1804)年の創業以来、日本のランドマークとも言うべき数々の名建築を手がけてきました。歴史をさかのぼれば、築地ホテルや第一国立銀行をはじめ、現存するものでは、国立代々木競技場、東京大学安田講堂、東京湾アクアライン（海ほたる）、豊洲新市場、横浜スタジアム、横浜マリンタワー、歌舞伎座タワー、大阪国際空港ターミナルビル、金沢駅整備事業などが挙げられます。また、医療福祉施設の受注が国内のゼネコンで最多数を誇っており、建築工事はもちろん、メンテナンスに強みをもっていることから、規模の大小を問わず多くの建築物を請け負っています。 さらには、大嘗宮という天皇陛下の即位に使用される伝統的な建築物にも携わっており、伝統建築から最先端の技術を駆使したビルまで、日本の建築界を支えてきました。

初代喜助（左）　　二代喜助（右）
【提供】清水建設株式会社

2019 年 5 月、清水建設は、経営の基本理念として掲げてきた渋沢栄一翁の「論語と算盤」の教えを、改めて「社是」として制定しました。「論語と算盤」は、道理に適った企業活動によって社会に貢献し、結果として適正な利潤を得て社業を発展させるという考え方です。この教えを役員や従業員一人一人が実践することで、創業以来大切にしてきた「誠実なものづくり」の精神を今に受け継いでいるのです。では、渋沢栄一翁と清水建設の間にはどのような関係があるのでしょうか。

清水建設の創業は、江戸時代後期の文化元（1804)年までさかのぼります。越中富山に生まれた初代・清水喜助が江戸に上り、神田鍛冶町で大工店「清水屋」を開業することに始まりました。初代喜助は、卓越した技能と誠実な人柄、熱心な仕事ぶりで評判と信頼を集め、江戸城西丸の造営など幕府の御用を務めるまでになりました。その後、婿養子の清七が二代喜助を襲名。二代喜助は、初代の元で伝統技術を学び、お雇い外国人技師たちから洋風建築の技術を習得します。その技術の粋を凝らした「築地ホテル館」や「第一国立銀行」（旧三井組ハウス）など、文明開花を象徴する斬新な建物の設計施工を次々と手がけていきました。渋沢栄一翁との関係は、三井の番頭の三野村利左衛門の紹介で知り合い、栄一翁が頭取を務めた第一国立銀行を二代喜助が手がけたことに始まります。第一国立銀行は、木骨石造、日本屋根、ベランダ、塔を組み合わせた和洋折衷の建物で、東京の名所の一つとして親しまれました。栄一翁は、「擬洋風建築の名作」と称えられるこの建築を成し遂げた二代喜助を高く評価し、以来、清水建設との縁を深めていくのでした。明治 11（1878)年、二代喜助は深川福住町（現在の江東区永代）に栄一翁の邸宅を建築します。栄一翁は、生涯 6 カ所に邸宅を構え、清水組はうち 3 邸を手掛けています。明治 21（1888)年、日本橋兜町に辰野金吾設計による西洋館を、明治 33（1900)年には、飛鳥山に邸宅を建設。飛鳥山邸は、その後戦災で焼失するまでの間、清水組が修理や改築に関わるなど、栄一翁のいわば「お抱え棟梁」でもありました。明治 14（1881)年、二代喜助の死後、娘婿の満之助が跡を継ぎます。満之助は、海外を視察するなどして積極的に先進技術を学び、近代的土木建築請負業の確立を目指しますが、経営をついでから 6 年後に急逝。長男はまだ 8 歳でした。そのため、満之助の遺志に従って栄一翁を相談役として迎え、その指導を仰ぐことになりました。栄一翁は単なる役員として関わるだけでなく、大正 5（1916)年に退任するまで、30 年にわたって助言や支援を行ないました。栄一翁の指導で、支配人制度の確立や営業規則の整備が行われ、明治 25（1892)年には、法律学者の穂積陳重（渋沢栄一翁の娘婿）によって清水家家法が定められました。江戸時代から続く同族企業を近代的な建設会社に転換させて、今日に至るまで建設業界のトップに君臨する地位を築いたのは、栄一翁の力が大きかったと言えます。清水組はこうした栄一翁の恩に報いるために、晩香盧を寄贈したり、青淵文庫や、誠之堂、清風亭など、さまざまな建物の施工を手掛けています。いずれも当代随一の建築技術が施されており、清風亭以外は国の重要文化財にも指定されています。

「憲法発布式大祭之図　江戸橋より兜橋遠景」
中央の洋館が兜町の渋沢邸。右が第一国立銀行。
【提供】清水建設株式会社

次回は、清水建設の建設事業の枠組みを超えた未来志向の取り組みと、社会に新しい価値をもたらすための事業への挑戦について掲載いたします。